

こころの旅

こころの
旅

芹沢光治良

新潮社版



こころの旅

著者◎・芹沢光治良
発行者・佐藤亮一
発行所・新潮社

東京都新宿区矢来町71
郵便番号162
電話東京(260)1111
振替東京808
図書印刷・大口製本
by. K. SERIZAWA

定価360円

昭和44年5月15日 印刷
昭和44年5月20日 発行

こころの旅／目次

1 ころの旅

- 啞者に語るころ・6……………記憶について
- ・12……………風に鳴る碑・21……………偶然と
- 恩寵・28……………約束と偶然・43……………良
- く年老いる・52……………リングとビスケツト
- ・59……………日本文学は海外でどのように読
- まれているか・67……………パリで会った天才
- 画家・77……………パリで会った三木清・87……………
- ……………歳月・97……………親孝行・105……………
- 人間の寿命・113……………九年ぶりにパリから
- 帰って来た娘・120……………明日を逐うて・127
- ……………鳩と凧・132……………「人間の運命」を
- 書き終えて・137

2 外国の旅

- 海外旅行記を読むには・142……………西欧文明
の一つの灯・145……………ソ連を旅して・152

3 フランスの勲章

- ドゴールとマルロー・171……………友好国際賞
と娘・175……………パリの文壇の内部・179……………
……………フランスの友へ／日本の友へ・186

4 時代の証し

- “十年の余韻”あたたためて・195……………小国に
生きる心構え・201……………天国の創造は夢で
ない・207……………「人口過剰」のため息・213……………
……………心に咲く美しい花々・220……………若者
を信頼していい・226

1 こころの旅

「人間の運命」を執筆中、私は他の原稿は一切ことわることにして、ただこの長編小説に没頭した。「人間の運命」を発表しはじめて、二年目ぐらいから、心に多少余裕もできたが、昭和三十九年の一月から二年間、毎月十枚の随想を或る雑誌に連載して、四十一年に「こころの窓」と題して一本にまとめた。その後、四十一年から「人間の運命」が完結するまでの二年半の間に、発表した随想が十五編たまっていた。

この間、私は「人間の運命」のために、日に四枚の原稿をノルマとして自分に果したような毎日で、日記もつけなかったから、この十五編の随想は、日記のように心の波動や吐息をとどめているので、当然に重複するところがあっても、私にはすてがたい思い出がこもっているが、読者にとっても、第二の「こころの窓」として興味があるのではなからうか。

啞者に語るころ

O君が生きていたらと、学徒兵で戦死した若い友のことを、近頃ふと思い出すことがある。その人が、私の胸に生きているからであらうか、ベトナムの戦火がなかなかおさまらないからであらうか。

とくに、その人とともに東大の制服で私の書齋にかよったA君、B君、C君などが、同じように学徒兵として出陣したが、無事に帰還して、今日では一人か二人の子供の父親になって、正月にはみな家族連れで訪ねてくれるからでもある。私も家内も孫でも来るように、暮のうちから、その人々の子供の喜びそうなものをととのえて待つのだが、その都度、あのO君が生きていたらと、学業なかばで散った彼のことを、ひそかに想い、出陣の直前にもらした嘆きを、切なく思い出すのだが……

O君は戦争に懐疑的であるばかりでなく、まだ死の覚悟ができていないからと、神経質に目ばたきをする癖で、よく話した。死の覚悟をもつために哲学書、とくに西田博士のものを一所懸命に読んだが、得るところがなくて、却っていらだつたと話してから、加えた。

「死を前に、純粹な心で、これほど切実にもとめるのに、何も答えてくれない哲学というも

のは、人生にとって、どんな価値があるでしょうか。それは、日本の哲学者がほんとうに人生の不幸に悩んだことがないので、人間の苦悩から哲学をしないからでしょうか。それとも哲学というのは、生や死の問題には関係のない学問で、学者の独善的な観念の遊戯のようなものでしょうか」

〇君の出征後、私はこの言葉をしばしば思い出しては、満足な返答をしなかったことについて、心に呵責を感じたが、また、ベルグソンを訪ねた日のことを、何故語らなかつたかと、後悔した。

私はバリーに遊学中に、研究室の同僚のラバスール君に、偶然のことから、この哲学者の家へつれて行ってもらったことがある。彼はベルグソンの門弟の一人であったが、私は若さの無遠慮と傲慢から、この偉大な哲学者に一度会っておきたいと、生きた記念物メモリアルでも見物するような軽い気持であった。

しかし、ベルグソンは、深山の湖のような静寂な表情に、仄々とするほどおだやかな微笑をたたえて、私達の話を聞き、真剣に答えてくれた。秋の午後で、ノーベル文学賞の賞金で買ったばかりの、ボーセジュール街の広いサロンであったが、話の途中に、全く思いがけない時、突然ドアが開いて、二十歳ばかりの女性が音もなくはいって来た。

美しく顔色の蒼白なのが印象的であったが、その場にいる私達を黙殺して、哲学者の前

へすすみ、金属的な声を出しながら、哲学者に大きな写生紙カキモノを示した。

その声は頭の頂から発するような奇声で、声というよりも音響で、意味がつかめなかったが、私はとびあがるほど驚いた。

哲学者は動ずる様子もなく、その紙を眺めていた。数枚の写生紙で、みな裸体のデッサンが描いてあったが、哲学者は一枚ずついてねいに見て、ゆっくり批評をはじめた。娘は哲学者の顔を穴のあくほど激しい目で眺めながら、ただ大きくうなずくばかりであった。

哲学者の表情は、夕陽が深山の湖面に映えたように輝いて、ゆっくり批評する言葉の一つ一つに愛情がこもっていた。

私は感動にふるえながら、異様な二人を眺めた。批評の言葉も専門的であったが、ここもよくなったとか、ここはようやく解決したねとか、励ましを加えて、最後に、さあ勇気を出してもう一踏張りだよといって、娘を送り出した。

それで、私はようやく娘が白いガウンを着ていたことに気付いたほど、茫然としていたが、哲学者は私達に、「娘のジャーヌがデッサンで長い疑問が、やっととけたと喜んで、見せに来ましたから——」と、わびて、すぐもとの静寂な様子で、話題にもどった。

私は感動で心を揺すぶられて落着きを失ったが、哲学者の家を辞してから、その女性が哲学者の独り娘で、聾啞者で、彫刻をしているのだと、友人から聞かされて、口もきけないほ

ど驚き、感動をあらたにした。そこからオートイユの下宿へつれだつて歩きながら、その感動を私はいろいろな言葉で、友に語った。

それ等の言葉は今では忘れたが、ベルグソンの哲学のなかに、独り娘が啞者であるという人間的な不幸が、影をとどめていない筈はないと、話したことを、覚えている。

ベルグソンの哲学は難解であるが、そのスタイル（文章）が、福音書のなかのイエスのように、いろいろ卑俗な日常性のなかから引例したり、自分の心のなかを公開するようにして、読者に理解してもらおうと必死で、そのために平易であるが、それは、啞者の娘に話して、唇を見ているだけでもわかるようにという、父性愛に関係がなかつたか、話したことも。

私も学生時代に、西田博士の哲学書の難解に辟易した経験があつたから、哲学者がわれわれのような常識的な凡人とちがつて、観念だけの世界に安住している超人であろうと、想像していた。それ故、人間的なベルグソンに感動したのだが、ラバスール君は私の言葉を笑いながら聞いていて、最後に注意した。

「哲学がその表現のために難解になつては、意味をなさないよ。元来哲学というのは、ソクラテスが街々の角で、人生に悩みや不幸のある凡人と対話したことから、はじめた学問じゃないか——」

その時、私はこの友に、自分の考えていることを伝えられないような焦慮を感じた。それ

も、考えれば、学問（哲学も文学も）のあり方や、学問と大衆との関係などが、フランスと日本とではちがいがあったから、やむを得ないことであつたらう。

というのは、日本では、学者にとつて、大衆は啞の娘であらうが、学者は啞の娘など無関係だというように、啞の娘にもわかるように語ろうと努力しない。実は、学問というものは、啞の娘にも理解させて、啞の娘を一人前の娘に育てることであるが、それを忘れて、抽象論愛好者だけを相手にして（仲間だけに話すだけで）それを学問だとしている。それ故、啞の娘はいつまでたつても、一人前になれないでしまふけれど、ここに日本の不幸があつたのではなからうか。

このことを、私は学徒兵のO君をしのぶ度に、切実に思った。とくに戦争がすむむにつれて、日常生活が苦しくなったが、戦争中の不幸には、戦争そのものから生ずる不幸と、日本人の民度の低さから生ずる不幸とがあることを、さまざまな形で体験して、それに気がついたからだ。

実は、私もO君も西田博士の啞の娘であるように考えていたが、西田博士も私もO君もふくめて、すべて日本の知識人が、大衆を啞の娘にしていたために、啞の娘に復讐されるような不幸な目に会ふのだと、気がついたのだった。

学者や芸術家など、あらゆる知識人が、現実に背を向け、凡俗を軽蔑して、自己の狭い専

門を貴しとして、自己満足している間に、一般の大衆はもちろん、軍人も政治家もかたわな
 啞の娘になり、知識人の言葉が通じなくなつて、知識人を異邦人扱いするところから、日本
 の悲劇が生じたが、知識人もその啞者から復讐を受けるような不幸にあつたと、気がついた。

言葉の通じあわなかつたのは、知識人と大衆との間ばかりでなかつた。日本では、陸軍は
 陸軍の言葉を、海軍は海軍の言葉を、政治家は政治家の言葉を、天皇の側近者は側近者の言
 葉というふうに、めいめいちがった言葉を使つていて、他の者を啞者扱いしていたために、
 たがいに意思の疎通を欠いて、誰も戦争したくないのだという本心をさぐりあてないで、無
 謀な太平洋戦争に突入した悲劇的な滑稽を、後日、極東裁判の法廷にさらしてみせた……。

そればかりでなく、日本の学者や思想家や作家が、仲間どうしにしか通用しない言葉を使
 わずに、仲間のために仕事をする代りに、啞者である大衆に、わが独り娘だとして常に語り
 かけておつたら、民度をたかめて、戦争から生ずる不幸も、多く避けられたことであろう。

〇君は出陣する日に、私の手を握つて言った。先生、ぼく達に代つて文化の灯をまもつて
 下さいと。それから人間魚雷、回天で出撃する直前、遺言のように、最後の手紙をくれた。

「先生、ご健勝でしょうか。長生きして、いい仕事をして下さい。それをのみ祈ります。

万感の想いをこめて。

〇

私は〇君を思う度に、彼の言ういい仕事を、自分はしているかと、反省する。いい仕事と

は、聾啞者をわが独り娘として、語りかけて、立派な人間とするような作品ということであろうと、あのポーセジュールのお宅で見た静かなベルグソンを思い出して、思うのだが、それはO君が私のなかに生きている証拠であろうか。

記憶について

人間の記憶は、案外不確かなものであるが、実に不思議な力をもっている。

私がフランスの大哲学者アンリ・ベルグソンを、パリのお宅に訪ねたのは、昭和三年ではなかったろうか。この哲学者がノーベル賞を受賞して、その賞金で手に入れたポーセジュール大通りのアパルトマンに移られて間もない頃であったから。その門下生のラバースール君が、私の学友であった関係で、気軽な気持で彼について訪ねたのだが、そこで全く偶然に、哲学者の独り娘に会って、このジャーヌ嬢が聾啞者であることを知った時の驚きや、聾啞者の娘と対話する哲学者を見て、ベルグソンの哲学の秘密を知ったように感動したことについては、前節に書いた。

しかし、私は経済学の学徒であったし、それから間もなく結核にかかり、スイスで闘病生活をよぎなくしたために、哲学者を訪ねた日の感動も忘れ、ベルグソンの名さえ、私の記憶

から消えてしまった。

それから十五年もたって、太平洋戦争の敗色がこくなり、徴兵猶子の恩典が廃止されて、大学生が学徒兵として出陣する日を迎えた時（昭和十八年の秋）、お別れに書齋を訪ねて来た多くの学生が、ふと私の記憶のなかに、ベルグソンとジャーヌ嬢を鮮やかに蘇よみがえらせてくれた。

というのは、出征にあたって、戦死の心準備のために哲学書を読みあさるが、日本の哲学者は生死の重大事について答えてくれないと、みな嘆きをうったえたからだった。その時、あのベルグソンならばと、ふと考えたことで、この哲人は私の記憶に蘇ったのだが、あれから二年ばかり、戦争の終るまで、執筆の禁止にあっていたから、私は記憶のなかのベルグソンやジャーヌ嬢としばしば対話して、自分を慰めたものだ。

ソルボンヌ大学の裏手のコレージュ・ド・フランスでベルグソンが講義をするのを、聴講しようとして、一時間も前に出掛けたが、社交界の婦人方が何時間も前から従僕に席をとらせてあるために、かける席がなくて、悲観して帰ったことも想った。拡声器のない時代で、教室の外から哲学者の声を聞こうと、外から窓へ梯子をかけて、それに群がって聴講したほどだが、それほど人生や真理を誰にも通ずる言葉で語ったベルグソンであるから、学徒兵たちにも満足を与えることができたろう——という想いが、戦争の末期に、常に私とベルグソ

ソとの対話をさせたのだが、また、私は自分の文学について、ベルグソンに聴こうとしたのだった。

敗戦になったが、学徒兵の幾人かは戦死してもどらなかつた。一年ばかり、その人々の霊に憑かれたようにその死をいたんだが、思いあまって「死者との対話」と題する短編小説を書くことで、死霊をしずめたことがある。

この小説は「啞者の娘」と副題をつけたように、戦死した学徒兵O君に、ベルグソンとジャーヌ嬢のことを語ったのだが、発表してから、この作品をすっかり失念していた。

作者にとって発表した作品は野糞のようなものだ、或る詩人（中野重治氏）が書いていたが、この小説は、私にとって野糞であつたらうか。二十年もたつて昭和四十一年の秋、或る出版社が現代日本文学全集のなかに、私の作品を収録するにあつて、この作品の名を挙げたが、私には全く記憶になかつた。しかし、編集者が持参した作品を読んでみると、確かに私の書いたものであるが、よくもこれほど書けたものだ、われながら感心した。

不思議なことだが、戦後の混乱時代に書いたので、忘れたのであろうか、私のものした無数の短編小説のうち、最も佳い作品の一つを、忘却のなかで発見したように喜んだ。その時の感動が、「啞者に語るこころ」という前節の随想をうんだのだった——

昭和二十六年の夏、戦後初めてヨーロッパに行き、パリで二カ月暮したが、ベルグソンの